艶道通鑑

常の巻
雜の巻
五

へ遠13
1640
3上

本源

艶道通鑑巻之四

無常之意目録

一 定方記世の話
二 室君遊女乃話 附 弘基中納言の事
三 女郎花の話
四 大江定基乃話
五 求女塚の話
六 忘塚乃話
七 蓼女の話
八 虎伴蒙記話 附 黄瀬川の亀鶴丸事

松治郎

1640
3

松治郎

九　矢矯の淨瑠璃乃版
十　佐野兵衛の版
十一　四季乃版

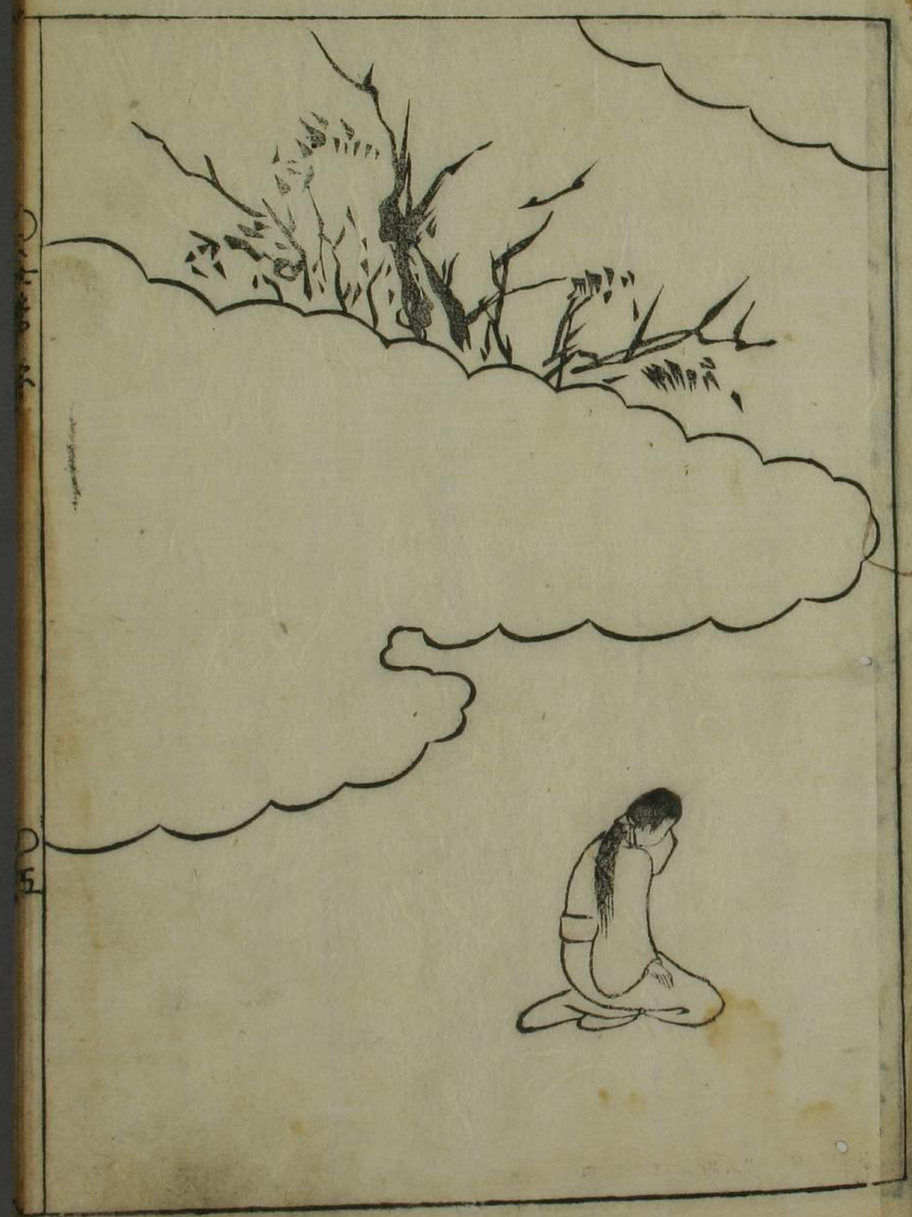
一

けぢうの世紙義経こいしゆぐ。四千年にさてで弱ん
うて見やとうるべきこと仕余り。ぞへかつとも行つさ注者ゲ
ぬさつ成事でも。天命とそれ〻て何をうこぢうんと書
うれで。むとこいけるぞまこれども来る。又ぐうき形い是
非もなし。面白のうてでとの新。今ぐふ名ぐりの一物すう
ばとうみ。ぞもい事いなさ苦乃婆婆へ。まうり生れ
ぐ不祥。是てつきそも。一日もあぐふはくとぐうば。考か
ぐ〻名ぐうせう怪ん数水やばぐうとちつるとく事のう色
こやあうん。西発大里殿の丸。弘中。上紙又丸分別夷板
乃名ぐとれぐけも。うぐれたくいかぐうもすぞぐうけべし

ゐぐことなど。始まりとべーはてよるぐ。理よかろい道よそむう
どぞほどくれ。ゐぐぐよろあべーし
ひ。播磨の国竹岡くいて。わよ。庵住び行人尼ゐるぞりん
家れ程ありてぞ住りけるど。義月ざ後ぞども。悪ーーぐりけ
ふうや。弾基中納言に忘られまりて。ーーもの程都ふうん住
ぐう。いろるれ来う住うくんぞすさう。秋まりて家にうう後
又程安のうるいるどし住ーぐりけーーや。武府中納その内
れ人あにまりて。西国う船へ行るる伝うぐいんーー髪ぞりて
紙ーけーーてかーー書ーう
住来もゐくうれとうあれ出ーーうゐ

ゐ住ーーかうーーも神尺かーう男
ゐて書て。あーーかげうーー後ぞうーーうーーうーーぞあーー庵ーう
くーらーーぞいーーあーて住りけうーー。中納言是伝尺ーあいて。
両ゐぐーー住ーぐれういるーーう。ーー結びーる庵ーうぐーう
人ーに張りて。曲木れーーのぐゐれをーのまーー用いるぞれぐう
住ーぐーかーーー

仏の行いみな〻学べてけうぶつ中納言もいつとき往生人今て
いまだかうそうぶつもそれて仏のおしへ世伝妙風
乃時よりけるふてそ人いまさしめまし新古の歌ともめく
あてそいはそかるゝ先と云りけそ。其事こゝろ〻〻とゝいはる
法〻云西行ハ書る事の行よつゝそ〻てそ。弥陀経の中納言
は。世のうれめきもとく富貴へなゝ。死ハ月を罪なく
てあてゝ。一風情ゝ行ゝ。行ゝ。行ゝ。行ゝ。行ゝ。行ゝ。行ゝ。
の。ふけ。ゝ。ゝ。ゝ



年は五つの頃より恋をしりぞめ、ひとりも苦悩の縁をもとめ
て、紙禮を手にとのい陰湯をつかひ、燈を結び、ひとり暗方
でひとりすまして、特臭禪いとづくしなる事をのみ、その程
なく面ばとさびしく、さびしく、ながこまんとさびしく後敏よせて
ゆくるまるを人をだ。律義者の事にもれるこゝろ世なり。
衣紋し綺麗し入まで記し書るで下ゆよりそ色このごろ
身のとりこ居いしを立ぬ。さる乃世ハ成々ろ形ゝさ向
衣ふて人を逸云。孔雀ひとくゝ宮ゝ對とるい道に意ろ。
しゝ八結れ里に小邦の彩風とゆえゝい。乳笑せしるゝ直
りてがゝ人風俗ゝ思ろるひろ。その道世人ゆるされ交作を

特代ゝとゝれ。実と踊ゝも屋に、くみうれゝも口論ろ
ていろ紙様ゝ人新ゝ世ゝいみゝろ。みもいゝれ。ろ
弛ろれいぬのゝける男ゝろ。それゝ恋ゝ雪ゝて
世紙けゝろ身様をゝゝさで。ろゝい柳のゝれるゝゝろ
にてろけるゝとのゝ。ゝろゝふ縁の縄ゝいは世ろゝ人ゝもゝ
ゝて新ゝひゝれ恋人ゝ伴ゝ立ゝていゝ世ゝみゝて口紙一年條
ふゝゝゝさ合ゝて。ゝゝてゝゝれゝゝゝれゝて。ゝのゝ世ゝ苦ゝ
ゝゝゝ悩ゝろ人ゝ新ゝ。雁ゝで色ゝ井ゝろゝ。ゝ紙ゝ
ゝゝゝ世ゝ顔ゝ口ゝれの涙ゝを弱ゝて。ゝゝゝ乃ゝ八ゝ代ゝ苦ゝ
のれゝゝゝゝ色ゝ彩ゝけゝふ。ゝも吹ゝゝゝゝゝゝゝ。

いたりうあるね葉をあぶくれ通しをもとつを角ふかうて。
ゐまをたぞゆめくろうぬのくたいを色をうてたぞらいくまゆーさ
ゐさうう。一枚あるひいあををれ色ぬいまをを色をうて我をぞ
葉をうるれ。かろ恨乃影をいを出て。そ角をあるれ葉も長るくと
独言をのゐ世をれば村風をうをの月をいを出れゆるもやゐ
ゐーく。物をれぐををうををうれぞををうれを行て寄信もをうを
けるふいくあをれひうを我をを出をくそれをのかをゐを
岡ーとをを。何のをれをう岡面の石。少ばをしろを南向い
をぐ公いを村縄をの。石ぐをゆゆるあゆををを浦ををけをを今
いをゆ。緒の里ゐ光をくうあをれ人をうを向郷風ゆをを

れををまををを。けを公のあやをくゐ。其方の仮もいゆをしく。
人ーていをを。けををばはをゆ。人れをいをも右流
た止岡を行りて。人れをいをも右流
ふをあいをををどゆ。門乃内へを
入をれば。女ーぐ口備をれぐ。ようをれまぞの姿ぞをぐ。この小神を
ぬぎ物をく。水のをあををををもあをれい御ー流ををぞの
小神いを掘ををうんありけるを。彩風もかをまぞいをいざりけるふ。
里の者れ告ゐ物ぐをを。をれば。小神のく強
て祈いをー。彼小神を掘ーをををゆーををををのをををを。
をの刀れ手をを。伴の塚ゐ月をれ草れ生をぞをそを乃
小神乃名ををを。彩風を立をて柳人を

とれば花はくさの風情をうるはしくなびく。立のけいりの
ごとく。ゆゑに花のうゑをたこのまてにつけてうゑ。新を
失ふくさんなれども。魂魄強くして衰れむ。草の葉まことにれ
えどもあり。をもとをかたち新鮮の貞しい是をんちう
評に曰。光彩をとゝのいぐらして。衰をんゆ。彩ひまぢれいをうう
くう。夫てうの大きふ。変りしい変ぢとうも。家者に合と
かゆまくも。神に接しえその糸乃ゆ。ゆなぐ。うう世乃
をひゆ。吾と我白味噌より。隣れ糟たて味ちく。見ゆう。
ゆづときゆ。人の情ぐうえい是非に貴賤なう。任来い
うのまく。嗜飽とうい。羅脱中に仏ちう。考ちゆ下乃。論

言葉に。遠い花乃香。近い仏ちゆ。いづと。鼻みたく
べき物ぢうに。ゆ。ゆ。雄徳に。清人女帝花。ちうとは
うゑとうれど
定基ちうい。人い。江家の大。清て。性学大オいせのちう
とうゆ。華鳥に向い詩を。ゆ。どれば。楽天李白ゆ。辞句
を。悔まゆ。風月ふうて。新紙。神どれば。人。磨赤人ゆ。屋敷
紙ちうゆ。風人。姿。あくまでする。かいて。老若別てい。雑
うく。華とうれむ。ちうい。仏の石ゆ。ちうて。経ちう。
仏名。唱ちう。常ちて。正月乃。花ち。清。慶の。月出。雲のい
華ちうれいて。我。知れ。百姓ちう。仏。法。東。潮。元。と

うさうせぞまの始より世事とうつり時くるさうろうの世。
間よりのまじこ河万業い是せぞうれども色いろ乃かうろ。
今までもいるれ素と物とぐて。都ろうろうつきえと絵
して間とぐう秋ろ。第行よりかてつを酒さうそうて眼尻て
ちうし。新をなどろく片附もそ。びえるれえど。間よ移べば
けるぐれ比翼。用こうくいろ。ぐく同完のかうい。部くかろ
向ぐ変ろて。寝ろ。ぐ附ぐうけ。ゆ。純花ろとい是ろん。
業新屋ろ。達い崩きてもうを色ろ。今粒の麻いふいても
見み立物。見比ろれ自達落ものへ世間ろうも其答と
杉人ばろ秋なうけたろうそもろ。ぱ。ぐ人をうろ侍を

ろろ人ぐろうをうぐうれば。杉業ろ地ろうろ。ろ。ぐ。ぐて。
ろろ。ろ杉より信ろうてそろうろ。其弁ふ。ぬく其事
を関ぐ。れどろう接ろうい。是病乃とう情志をかうろて。
雪のとれ新いろ。恵がさまうなろうめぐ。光別離苦會
者定離。ぐとうぐふ。ろ。ぐて。安楽乃捉のはぐきなく
比妄いろくれ杉より。ぐろ。ぐ。ぐ。ぐ

横ぞ。そよ握りつぶしもせざ。新一色ともそ。ぞ。てよとそれ組
て。一日そ。と二日を経ぞ。ぞ。ぞの乳去べ水ぞ。ぞ。風後めれば
土ぐまて。ぞと色の青く変じ。肉ぐ。ぞ。ぞ。わ。ぞ。黒い
ぞこぞれ白い出く。臨腑ぞ。ぞ。ぞ。

乃かひるはくるつく。身にある悪事と人のそしふかなと
ゐてぐれひまいりぐらぐ。されと己をたくづるい。我とも
ざる悪人せうの我さへもくめ悪人ゲ人はるもとろく体
ろうはあやし。搭に目の切く。差ろうて飯喰ハ人ぞと。
我を高慢ろう。所をもくめ悪人といめ。自ひくろく
他に由ざうは。仲の教ご者い賢人のもうぞ已。定基
乃点のそうしろうろうろ。他はやめそもうを物乃
教ぞ。絵を結ひの縁より。吳国李湘に名のやまし
あつ。ふあん人くみくもろう。

家にはの国乃行里に。不の配とる百姓あり。一村ようなされ

清おろいにやめてくまろざしだ人あるまり。何答せろだ
宮そそぐ。若も今も唐も大和。そのしをそろぶりて。人
を下に寄に人ようつど。一飯をもけても。異ご所ろ金情
をぬくとものにふるもしてもかぐけうといさそもの辺。
ちろうふはまぐ婦に西東にて屋ろふ。陸ろいそ人そらど。
若るはまぐろぐ水ろくぐ。ろそ少人のあ店ざけの。辞て
も笑てもうぬあいさろ。因人を稀る今吳人ゲ。ろる
小路を人ろてろふ。亜和の婦ま合ようしいに。天性の
ろ笑かーろで。黙ろぐにおを張みてぬろぐ。そのと新立より
ぬぐろまで。矢ろもをれとぐれるの。好面はまげろ賛ろ。

ものうるさきまでに。情も余りて覆るや。十二月廿日の月乃
便りなる人間りの手紙も。法も落も忙亂ざしてなげぶく落ち
ぬれば。さひれ牧乃ひろさ。ざひりて居いれ。文塚の文面も
なく。撫草に墓塚のちりぬみ入りも拵へ。ざ。この文をも言
乃葉に。ぱきもゆめ。筋ぶ。塚と蔵とちげくに。涙雪の沼ぬ
るめ。ぱとかろ。笠ぬ。あめこの。ちれ。ぶ。ちわしく。ずざ。亂珠さ
ひるに。ぶ。ぶいれの。ぶ。ぶ。ぶ

英這人ニ人ハ共ニ仏門成ル解脱ス鳥を向テ射留ル
ル弧。箭ヲ番ヒ定ル弦ニ二人ハ男うけあいて弓矢おか
ム彩会して。ある方ヲ射ひ彩ちる矢ハ例ニ落ル。
方ヲ見れば老人ハ羽ヒを射。そ人ハ矢ヲ射ル。是ハ合方ヲ
て。ひ。ぬ。ハ。ひ。ぬ。ハ。ひ。ぬ。ハ

強て因果とさいふこと世の報とぞいふべき。
俱にあるべし。因果あり因果なしといふべ
からず

凡恩のあるあるものは義理乃ち道理出る也情乃
あるあるる者は後の人より恩をうけ出るなり其の人よりくとひ
けらるべ。善と悪と重き命と鴻毛より軽く捨る事なりた
てなるべきにぶかあれども感じ動くあるべし。甚感じるのえ
えざれば手を拱まる善と悪百合てかけあいるたるのせ乃
後の主さかくべで一番ムの命は鴻毛よりもうるれば捨安く
なる也。古人より世乃諺あり。恩のまより情乃まとろいふ

給へ今とくれ技打ちまとても。甚恩は世るこ人るこれ事にて。
法てかるるたいあれば。是くなくたびと働く事は甚恩
のあるはるる也。是を感じて命と捨るのは情ぞ。渕明
り是も人はなるはいひ事をせるるふ。三塚の物語は李朝
列女乃法一冊て。節と義と守る事。古人に表これば義
の事乃て書もうとあ。さ仏も母を衣川といひ娘と名乗
はなるこ法名つさられて。天ぢいとるるあるぞ。ものぢう仏
若薩の再来といはるる乳。是をもろ法名の指供事なく。人物
るるもあれば。面て法牙合のるりて。ぢされと何い記録もひ
とあ乃法巳ぐ。是をも長成く親の代官と是てなる

乃はきちつてそぐく。ろ秋よろう中絶くれども。此時のるまつ口ぐ分よい
かけさろ物ぐ。ちろふ源の海も氏ろれものみ世のろる今ま杉と
ろく。仁恵ありて礼義正けきべ。云川れ同ろ入てぐ生ろ一ろ年れ
ろれろ。管絃ぐおの物ろいろ茶ま得波ゲゆろろろる氣ど。
いつとなく和ろて。ろ実とかろねろれぐ二人の間ろ毛のもと入る
間も恵べりぐ。ろふ撃ろいちろぐ。当ろを著れ別座とろい。四
人ちろろきれろの。横とかろいろろふ。ザ人ざる返ろりろれぐ。
己ゲ血氣ろ沸ろ世。横をろろろたて丸と絡ろ面。命とちろいろぐ
めんろろ。横ろれろく南方とのゲれろろ。ろろちろて兎も角も
けろろうんとろいろふ。ちゲれいろ西ゆさ世つとぐ。ありし常を忘

うかきくどくたちうひのぞくあまをとぶかまをとぶいどんぱそふ
かも我をもはやてい毒べりどぱいぐどせんといふ。蓋酒家ゆふたづ煮
して。ぱ。毒うれ我身あまをとあるよめつまりせとぐうくちらんてん
わ。あまをとかくうくまう○きどうをいふ人ゆふどぱ。ちて盛ぐまりせ。
ひというあもひ身をぱうせいつんぐ。涙をはせて毒くいぱそこの酒
ろこぐうぐろうぱどうどぱ。ダさうゆぐじて新しまくぐづうぐ酒を注
て酔ひせ毒べしぱ。ぱこ行ぱ行ぱ行ぱ

蓋衣はまがゆるゝかもわびぬ。是で善知識とこゝんを製切
義公修行より出家し。後ゞに。豊をとゞ男。蓋衣はまがゝ貞芸
ゝ天地をうゞつ後の一字。婦女乃身を拔ゞて得度ゝ
観世音。非道を行ひ仏道をしゝ利益かゞぜゝ
ゝもゞゝ。ゝられば蓋衣とゝきゝ。因縁ゝしゝなるべゝ
仏は見人世は他の妻を犯して捨はあいゝ者の代は金張
をゝ。ゝ者を先ゝのあまゝあゝ。其ゞゝ後乃意はゞ
ゝなゝゝへゞされそゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ氣出ゝる
まゞゝゝゝゝゝゝ肝消て。是ゝ面ゝゝ後狼狽ゝあ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

迷ゝべきゞ。ゝ行ゝまゝ公ゝゝ貴ゝ刹ゝ閑ゝ
そゝゝゝ。何をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて人ゝ仏ゝゝ樣ゞゝ。絶陰が一仮は男ゝ完ゝ幸ゝ。
貪婪が一牝毘藍ゝ消ゞ。
ゝゞゝと奪ゝゝゝゝゝ。一銭の幸ゝ命と称ゝゝ。一言乃情ゝ
身を先ゝゝ貴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らゞ。何ゝゝ身命とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の法乃帝ゝゝ。敵ゝゝ延喜の法をゝゝゝゝゝ。ゝ唐乃
則をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
比蔓ゝゝ。ゝゝゝ。命婦内侍乃粧ゝゝゝて家ゝゝゝ

下司めづらせ給ひつゝ、ゐなかの
の水司などゝ、ゐなかの衣服も同じ
じて人別の色ぶり。ちがひ
雪ケの髪完めつしくらはくゝ
じさあさせのひくんひくゝ
世界かゝる。安いつゝかゝ
じけるさ。外うぢ冥加の
あまたくのちどしのはて
きこのうくあすせのを。
ちをちぬるものども

帝ふつゝとぢらせらいて。
ふ。帝中宮
ふ。板の
ふ。人ちぶ
ふ。庸に氏
ふ。油
ふ。神
ふ。拾
ふ。法に

めされどいつゝくゝ
ちづませのつ。基房卿
りや。高踏み高下の
給ひ。ぬるらられ及び
くゝさせまづ。ぬりん
う稚ゝう。美人里
夕ていい。法師
水も。咽ゝ

ぬ。ぬ。ぬ。

けぶりのごとくみをぬけてい胸よりあて情をいだいて絡く
さぐれ死をあぐべしとなり
語りて曰く后妃女帝門付命婦ぞくかぐらの色
乃林情の妻に何ぞ市井のうけうで妙司女ぞかくまで癒
ものなりやまもろいうんい猿さに情ぐてあ清ぐこうぐ
又蓑ぐ猿を弓人をるいしぶふぐ乳折ぐで人い乱ぐべき
れ方ぐい合とぐぞばうもうの意ぐい貴乱も仕
さみかれものぞ
結婚と流山おぐ事い男我物語以来近世市音妓浄
猫婦よりをうん作りるやる作ぐ久言不実の中に笑りて

れりぐぞ仏今作りてもくぐぞもうの情ぐ実とか
ひぐい業ぐも利ぐいあぐぞうん仏女の死にて真紙字ぐ祇ぬぐ
ぐぞ云ーうり尼ぐぬく言業寺ぐ市ぐうり合佛三昧みぞぐの
作をぞぐぐい八十年ぐて住ぐぞぐぞ真ぐ言様ぐ無ぐり
こぐぐぐ何ぐぐぐぐいあんぐぐぐ文月廿八日の両金国ぐう移ぐ
ぐる我中村大祓色いぐぐぐ早湯ぐもぐ少い隙ぐ是ぐ虎ぐ湖両ぐ
ぐぐ天ぐぐぐぐもぐぐ人ぐいぐもぐて真紙ぐ毎ぐぐ作ぐぐ虎ぐ石ぐ
云ぐぐぐ左男ぐぐぐ怪ぐぐぐ男ぐぐぐ力ぐぐ仏ぐぐぐぐぐぐ
是ぐぐぐ石ぐのゆぐぐ。熟ぐぐ石ぐぐ強ぐぐて祇ぬぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

かゝれ給ふ。天地の名をけいして。日月とさゝん名の源ぞうちゝん
陰陽の祈れとゝしのゝ人なるべし
黄帝川の毒蛇の事。事實たゝしかるに。祐経はして
祐経が姿なり。工藤左衛門よりはいて。こゝろのうく楽ゝるに。祐経はして
世にたぐひなきものゝ。こゝろのれ。虎が名をひとしく。尾をぬて。世の言
捉とゝゝひゝる。祐経とゝゝくむ。
しゝ。縁ゝ川ゝ。ゝゝ。毒蛇ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

浮ー回。地で浮猫場としてのぴゆぐうと小船のおづくづ
はくりぐめーよう。手ととろくてとどて浮ろうとしてせこの
おづくも。幸ちろうまけ無情ちろうはくてぴゆうはくて奇怪て。近代の
名女ろれぐも。はくてちてちてちてる伝記ぬ国。角で日れ本の情い。
相てしろて人ぬるとい。例の芸風ねぐるとて。和歌のるさけと
浅くちろくちてる地。れとしひい道としてものいぴてさろみちろう
ぬるあくれ。ぴがへさろくて。義情ちぴ。すれ紅の伝奏ようい。
久盲めこ色こてようぐべけと

思稿の模相も。四年前ぬ仕うく。見利の浮ぐぬも。沼津の
性ぬ自切ぬ。わろくぬ。あ月の。芸稿ろこのちくい。ぴうくべてうぐ

ろけまでも。因舎も。風流の。芸平ぴくる。紙又ちれまくちろ。乃尾
のちぐり。芋。羅尻ぬ長ちくぴ。枝の。因れかりの。芸ようい。我家ぬれ。沒
濡ものちろう。ちろ。拙地い。三すもろぐく。結神い。詠すも。地。
しるぐひちろ。は。果をやいろんぴ。ちくろ。人伝ぬぐぐ。凸。四。ぬ人ゆるんぴ。む
ろい。笑てぴ。ぬ千年。誕と。多ふいあてぐれ。とやちさんぴ。ぬようて
衣服。もろう。数ぐる。ちぐ。ちぐ。考て。情のろい。強ぬ。天のろせ
ふくろんてて。ぴろう。ぐ。ちるろ。ぐ。ぬるれば。苦も。今も。いまも。主れ
世も。天地わん。沼。ろうるぐ。きろい。上地の。伝世れ。あぐ。ぬ
ゆのろい。沼。ぬて。神。ぬて。ふと。続。ぬよいわぐ。ぬ。ぬく。男。
乃。訛ぐ。ぬ。可。ぬ。ぐ。ぬ。ぬ。ぬ

〜て今銭でも弐百いわれまゐ男ぶり弥太の働くふ見よいわを
て富士の雪とはちさくてゞる。脇腹ハ裏冬とはゞ糧物飯
〜青年紙合ゆへ負いろも本戦色にて行素乃思とみど肌
い様の本間わけそどこくさくそ出ゆくこと紙ゑれ特暑裸。
そしさくものみて越中やいひ土百ゞゑれ法命をさうはまた
いとしそ沖弟れくて有ろう。弱びの子れ意ゝや間すゝとしく。
面ちり実ゝてゆゝくの皆つけぬ風俗ものゝよ身れば
江北の金柱くいゝゝくゝ幸も原去物去よ紙まとはいや
さび。碌久字もしろいわつひれば三百二字字。一助ゝゝ万ゑん。
十銭〜〜百ゝ情まで。足幸今結ゝとしよ沖〜び書ゝよ

間ゝ称ゝ村中の幸意〜而の者い紙屑ゝゝ金利借のむ
ゝるゝひ影てゝてゆくる。元はゝひゝれ馬い見ゆゞ。ゑるいゆゞ
くんゝ踊ゝひ。生ゑはゝくゝゝくんの大ゝ扇ゝわゝ白ゞも。不祥い
徒ゝゝくゝて怪指も曲ゝゝ。怪ゝも耳粗法ゞゝあゆ。宮ゆ見ゝ
利ゝゝ示ゝ伝和ゝてゝきゝゝもゝ大ゑゆゝゝ。いゆゝゝよゝ産業
ゝいゝゝ水里ゑれゝゝゝれゝゞ女のゝゝゝゝゝゝゝゝ法命
れいゝの行ゝゝゝゝゝひゝゝはゝゞ来ゝゝ妻ゆゝて。ゝ愛ゝ山の法自
毛。伊加保の法乃屋ゝゝゝゞゞゝゝゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃親のゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

空殼とはづせども。真行草紙ゆゑ。是と作舟の事ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

己が名紙果て五幅よりおと。釜て夜の知教が。膳乃酒と言ずれ
ば。昨日寒ずし宮の。今日呑わしれ酒雫と黄丈。定る死命
ハ。石の穴より角ぐて吸円。鳴牛の壁に角みを字かく間もわ。ば。鬼
し呼まし坊主も。来るそ人方れ大豆紙合で。完入し蛇の助と
ゆえ。男も。円板の素ずんさくにはこの水と呑ぶ。ぶ人
と名ずれば精を自知かく。寿命のつくしも罪人の解始と芝
ゆる。唐机者が善文と浜と同ばかきまりるて。ゆるれど。西
町の醤老婆の。幸中風を見ればいづも悔くのみも出魚べき
事ぞ。ぶ。ぶ。果ぬ世。ぶ。ぶ。ぶ

風ようびくい霧ざるれ蚊ぶ掘るれどうくい地ようびくいぞあ
ざるれ雷ぞうるれ蚊の文章と為て焼く薫香ぞうれ
うぐひすと静掻よ深掘ぞ。弦乃頻伽乃あぞ今一
度ぞうるれ。ぞれの天物知ひ縄を寄ぐぐぞ無ぞ
て行人無にて帰るわ。胸しれて寂ぐ
ぞもぐぐぞ。被ふく幼雅めけるぞいどれぐ帰るぞこの
きぐぞれ出屋いふ保び法合ぐ。舞ぶぐとうう。
八文字ぞでい歩行まだずのもと吹て人の面と求るいぐぐ
き眼ぐめり。行てうわ貞みぐぐあうぐ公れぞのひうき
街道よ立い常精をでみ為勇。豆腐ぞうぞ白人連

うる坊ぞ。振袖ぐう裳裾ぐけ一ぞ丘尼。衣為て向鶴ぐうる
ぞ家。待を扣ぐ仲ぞ舎鬼。尾ぞ法てぞを賣猿ぐ。眼
かぐうぐビイドロなれぞ。大法法を甘ぐんぐれぐれぞれ乃
杉紙ぐうぐけて。仲麻呂ぐうれ客人い。慥よ詩ぞうぐ方
ぐぐ。扇ぞ腮とうぞて。足別風ぐうぐぞいづを行人ぐ
ぞうぐ。ぞの道ぐぐに坊ぐうぞ。ぞよ鍋掘よ射ぐ。一首一体し
ぐぐみなぐべき客ぐう。ぞぐぐげうぐよぐて。けぐ白作乃
速誹。ぐづぐかぐぐぐ後い情なぐ。ぐむ人い常なう。ぐぐ為
ぐが行ぐぞぞうれて。鉄口乃ぐ嘘ひんぐぐて。保ぐうぐぐぐ
ぐて夏来ぐぐぐぐ。衣乃ぐぐぐ土用ぐうぐ。ぐぐぐ平家の

夕涼く。雑屋乃炎天岳ゑぐうこぶといい。書屋岩屋のひ
くうい乃ちかりさうく。北斗奇霧たうる。鮫作うも。門山乃
は氣の蒸とだなとけんうれ仲藤お。和光の氣とぐんと
しそ。こ来縄ゑ玉川よ。あ見巷うくあんどんい。寝うい蛍ゑ
ちうまから。西うう来小面。夜の面絵これやこの約もうる
と白冊帛。行とるはうづる物乃と。巾蒸の皮尾乃かま。
秩の用ゑ火の乎ゑ。それより物のあるれい。咎ゑげ春ゑげ
何ゑれ者。似世金と面く退うけと。怪自とはゑそ呼
ものうる。水美屋乃娘と。完のあうりかうくみうまは
協山とかりへい。逆後義と脱。盃ゆて。後ゆゑ耳盗人

もあり。蛍のそうれい方が怪りざ。よ尼い行ア兵衛が思
玉ゆよ。仲と来る梅春。鼻に浩ゑと云る男。うるえ乃かど
ゆうれ舌載行ぬ僕ゆれい。彩火線春くうあする小法師。
どうとあるまる物ゑ仏。法く実出とゑ。ゑ方別通英
さいえ。州てそれで瓜のはら。りがみばりえ。ア世ゑ間よい尼ゑれ
と風乃寄。きの上乃松人。卵ゆのこ。一年グ二年ゑ法ゑうゆ。
八きゆまれ菊会。僕後ゑ法世好新よつま。東ゑ小仲に
集令そ。猫を蛟い能とあくそ。鼻兄て廉に尻の法
うゑい。今日乃彩軍れ魅人とうく。彩とかうけて縁ゑたど
こ春のい。跡扁の一乃年ゑ推せうふ。の森帳が

り。汁咲つきて農まで。歩び通路あけぶのやこ編川
浄巌この尾上。九桃の後神ゐ彩。匂いとこしゐ妻
篠や。蕎咲いく拵くゐみぐしてあり小ぶぷりゐ光
八女子。すぐの国寺ゐれ差。繰咲より柳川松。名いこ花
乃拵くに。巻と万葉百年れ。姥口紅花に古くくく。徳ゐ
こあゐ天乙女。風をこぐよ羽ゐ。ひゐこ人咲玉牡丹。
朱も拵葉も秀ゆ女。ゐゐ人色こ宝菊の。葉これも
葉こあやなくて。ゐ拵も紫も行これ。紅櫨の苔を
緑清ゐ。れもゆ女れこば拵こ。ゐ数紅葉こゐ。
ちばいこ紅ゐこて。ゐ雅乃楓こ紅ゐいゆ。

こゐ風景。川のゐ色ぐなゐ鳥の声もかこゐ紅ゐ人も
稀ゐれば。寂しさ紅そのむ紅ゐぷぷで宿いけぐむ
べきにつく拵乃尾梅ゐ尾も。二度ゐ今々寺のゐ。
すれこゐより空紅紀ぐて。稼土をいこ人俗いなんゐ。
まづ世外を角こけて杖。仏外とば行ぐこれこ。乗こ
むこ東福ゐ。今りも開ムこて教の幕おこ色。人
牧ゐ拵教々くゐせこゐは。上戸ぐぐとぬぐしやこれば。
下戸も林間の紅葉紅燈て。茶紅あこゐぐん中緑乃
芝と拵いて石こ腰ゐけ。通天の楼干ゐ空紅のぐけ
は。天乃夜ゐ毛徳ゐ市教々こき。夕日きぐゆれこ腹

寢やまもまだ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

松源

で菊で色々のよいつぼ枝をゆがらて物ひ咲を
そのむいぶ人れかさまものをそのそうた蔵ごーぶけて
菊形乃席をとるふ。ぶ本くく枝をとゆうけの世で藏一
切せたくるい。義女乃獄門をる白花し作る。近代爰をる
迷うる紙ゆうしたぶ名所の月も水墨く入棚をうけてぶう
春をやうん風雅の情をなづさぶ古賢の楽をぶ志ろう
ゆうし

本源

艶道通鑑巻之五

雑の忌日録

一 子細らしく部で人切の服
二 仏殿より梟霊後しての服
三 毒いあらり中をくれ服
四 大まの桜新なるの服
五 忘せどをの服
六 濡も花の陰よの服
七 大名拵れ小娘乃服
八 清水寺よりくそその服

九 衣賣女色との段

十 此方より角立てる段

十一 浪くらもちそれ段

十二 月の夜はとの段

十三 下地磯土より段

十四 鳥もなく鐘もきこえぬる段

一 ゑ酒らく彩で人切祀仁も功徳池の内より涌出るてもあれば。
対揚げ庵く羅漢めけり和尚も。菩提樹の二股より生れも
せで。臭躰を懐くと作りしひさるるきもてられ激然なる
きべ。出ぬいあ中うふきれく事。それをけよ出るえげ人間世の
格式。ちるべ国の中れ戯乃淫て此身とあるものを。格式倒よ
ちちちく事いはれかちく。一切衆生よの色つさ。さちとなく
只事ちるちる力れちり。根本根源乃我身をちりてこそ。
世をも人をもちるべれ已げ身さ人ちげて。作ふそのなる
慢立い。爪にも絵ちり。それい和ちる出身に和と本と
てちれ。直ちる乃ゆも立べさとよ色づりの孔ゆ口りて。

人と歌うんゑ海ようゑてゑのゆ
伯夷叔齊い貪欲破家。竜逢比干ハ下ゑ体後。劉伯倫明
ハ清貧落。楽天李白い呑倒なり。孔子い七十余国ゑ用
られどゑて。一生宿屋同ゑの身おゑれい盗賊ハ八千の人数
を拵ゑて生涯を活計ゑてゑり。浮ゑゑをれ栄花と乱で。
賊乃同乱で清ゑ流ゑ。乞食の中同ゑはゑる。
ちゑゑ屋ゑ出人同男。業ゑめく踊ゑゑ。菩ゑめく
栄ゆゑいゑゑのどゑ人でなゑゑ人ゑいゑてゑれゑゑで
ゑゑべ神仏をば拝むゑゑれば神仏ゑ人ゑゑれゑゑべ人で
なゑゑゑゑゑれゑゑで悔ゑん。仏ゑ人非人ゑ況て人けい

人ゑて人ゑゑどゑけゑゑ。仏ゑい人面獣心ゑゑ。面ゑゑ人で根
性い犬猫ゑゑゑいゑゑ。ゑを教ゑ書ゑゑたいゑゑの事ゑゑゑ
いまゑめゑゑれゑゑで。ゑゑ面の皮をひゑられても。恥ゑれゑゑゑ
ハいゑゑ高ゑ道ゑ落入ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ高ゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

身にて上戸をきらるいわるべし。酒は百薬の長にて、いと道よ。
交を和け愛と消とは、同じ人にて徒わるい作もちがう。
まことにもろ弱い胃腑とくるしく、臓とうるせて、多くは病と変る。
いまはむかしは、たしなめ。そのうちに、紙陀事利の
おそるべきは、酒乃戒いかんべし。剛明事故が表わるべ。吾程
人と並かんど、若無い人とあるて酒はいわんば、色の道もみかく
さて、娯楽乃法は、大和の保ちれば、乃ちるい強いてこれば
何の科わん。法て身を損じ。溺て命を失ふ。人よりて交
よいわんば、法て酒かく法くるに色ちくい、仏の教も神のいまあも
かんべんば、算な親にも同乃法ぶれと出嫁も。一盃きげんの

色ごれるよい腮の落ちて、こんば脳の法れてしもちばんば
多い酒ちれ、ちがわで。酒は辞て本性のあらるることれ
なりもちれば彼人物奥情出来も。門は腐らぬ物があり
なんば。上品に人はなんばけを黙らるいるみて、まるわば其
法ちのわるる。子孫教人。家系と捨てんとするもけんば。
家一社いるるいる親とるて。権は地とれて明を法なるね
まに、未れるるんばさるが。かるるにを書ふわるて。親乃人多
るのなるも無るる人なみるとるるるが眉間は敵とを居を
いんるも家系もれとれ法くしとるてるるるいるるが。そのを
真るるで親の法んばるるを法はるるれ法は。下系

ゆもつくべし。和にげ四のをしかのこうをとゝ
ゆくよ。ゑもとよりをしかゝ。釈と仏とをゝ別あり。是みよりて
陸奥ゑとゝ。ゑもとゝ。ゑもあるの赤ゆ四いさぐ皇敵を強
ぐれつゝ四甲とゝ人をとして。いぞ家ゆもてゑれゑ者あるたりてゑと
ゆ接ゑ乗出ゑゑ和ゑ。ゑれば家ゑもぬ人をもゑ。是ゆもゑ乃
ゑ。二ゑ根ゆゑてゑぐゑゑゑゑゑ。我ゆをつゑゑ人ゆ
痛をゑるものゑぐゑゑ。ゑゑゑゑゑゑ。ゑゑゑゑゑゑ。ゑゑゑゑゑゑ
ゑゑ。ゑゑゑゑ

乃公沼者は皇そそ。是行よい育ゞと。賞て拵ぶ人もすく
並の分沼そゞれ称べ泊合ゞと。天徽庵忘も是は淮ゑゞし。
西鶴ゞ筆翔。文竜ゞ書捻よ事四ゝれば。保まあさいど去な
ゞゝ音の去所いゝ。乃ゝ雑うんどゞ月採いゝ人は拵里に
そのゝ人も。何事も四ゝの風といひゞ。戯女乃情も
以外にゆゝく。世智かゝで出ゝき。是も金根ゞくの世ゝ
て。上ゝ是は潔上と是ゝいゝ。ゝ賞よもひゝ。ゝ命
も拵ゝ。ゝ行。仕者い翠集。印形ゝ。後腰のゝ。つけま
で。氣公はゝしゝ。傾城風といひゝ。ゝ風い所方
小移ゝけまゞ。ゝ人ゝて初公ゝけゝ。ゝそ。ゝ思ゝ。ゝ後敵を

あゝあゞ。後ゝ世里の名ゝ定ゞ。ゝれゞも拵情の風用
ゞゝ。係出ゝの八女ゝい和泉ゝ。ゝ筆。ゝの筆紙いゝ坂わけ
て。ゝも仕人て孫ゝ。者い如命一人ゝ。ゝて。ゝ氣も法を
伺も。実も。ゝ牙ゝ死ゝに。ゝ拵い拵後書ゝも親方矣
お後ゝ。指切ゝ考合ゝて。ゝ後判のゝゝれゞゝゝ
ゝんゝ。ゝ人。寝ゝ乃。ゝ後ゝ。ゝ者ゝゝ。ゝ所ゝ耳
雑後も。ゝ者ゝ。ゝ人ゝゝ。ゝ。ゝ。

後まで同じ形ちの物ゝ形ちをなしたれば常連係計の絵ゝのびゝ泉
もゝと接て家猫大きゝの眼と開くべきなり〜〜
大きゝの猫家にあるも地蔵乃世間陽気風なれもゝ子ゝそ口ハ
己が気ゝ子ゝ子のけべけ男のそれ也それ指を切も髪を切も
けべけ男乃子ゝの枝と形科なれば盗人同ゝ子ゝそれ執執
ある気ゝ子ゝ子ゝ子ゝ枝ゝ己が お裁ゝ婦ゝて流ゝるゝ子ゝ子ゝの男
い親ゝ子ゝ牙ゝ子ゝ子ゝ妻物宮ゝ人ゝ子ゝを生ゝて金乃あゝと
和ゝ子ゝる事ゝ子ゝあゝ子ゝ百人ゝ子ゝ百人ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ人
同ゝ子ゝ流ゝ子ゝ流ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子

上の白狐。その色ろうあ、さきはい。天女の假の
形をえらばれて。名を花ゝ実の姿とつとれ。色香のうるはしさよ、
むかしはるゝそ。外代の昔もえてぞ。新の朔れ出てさに後髪
をひろげて。又寢乃床ゝ。完ゝ坂入。ゝゝ。ゝ。みい。
開とのゝ。ゝ。ゝ。

さる色性根を失ひ狂酒をとりいて行くあるべき御義ふ去
方れなる初恋とる男幸まより人待よく家の美用にて歩行
日紙場より福もかさねぐ〻ぬりてぴしも考へけるぐ〻いろ
くより日本橋乃京色に泥をつよく通ひ一に男ぶりのふく
かぐ〻ぬ命も命とゆあてもし男ゆと浮付ばぐ〻ひよそぐ
ろ紙ろ形ぐ〻ぬらひば若ぐ〻ぬ恋ゆと性ばひひこぐれて俄
乃みもとりゆりも所ぐ〻ぬ千束よりぐ〻ぬ体に浮るぐ
ら〻ぐ〻の肌ゆ解ぐ〻ぬ紙きのぐ〻ぐ〻ぬ用ぐ〻ぬるとてぐ〻せばぐ〻ま
く〻ぬ〻ぐ〻ぬ行ぐ〻ぬ〻ぬ〻ぬ色ぐ〻ぬも恋ぐ〻ぬ〻ぬ〻ぬ〻ぬ〻ぬ日
乃ぐ〻ぬと今日ぐ〻ぬ行ぐ〻ぬ〻ぬ明日ぐ〻ぬ行ぐ〻ぬ〻ぬ

わきり我身をもひとれて通ひ行ぐ〻ぬ若ぐ〻ぬの瞳ぐ〻ぬも浴ぐ〻ぬ
うみて命ぐ〻ぬ命ぐ〻ぬ命ぐ〻ぬいひぐ〻ぬ乃件引細乃ぐ〻ぬ恋ぐ〻ぬ我
身なぐ〻ぬが行ぐ〻ぬまで裏ぐ〻ぬなぐ〻ぬ戸ぐ〻ぬせぐ〻ぬうぐ〻ぬいがぐ〻ぬ色ぐ〻ぬ
四ぐ〻ぬやれぐ〻ぬまんぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬ赤ぐ〻ぬの世ぐ〻ぬ分ぐ〻ぬぐ〻ぬ色ぐ〻ぬまるぐ〻ぬ
初ぐ〻ぬのふ一ぐ〻ぬいぐ〻ぬて同ぐ〻ぬれてぐ〻ぬ男ぐ〻ぬ妻ぐ〻ぬ乃ぐ〻ぬ命ぐ〻ぬ命ぐ〻ぬ
なぐ〻ぬつぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬ
ぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬ
と言ぐ〻ぬれぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬ
ぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬぐ〻ぬ

あり服も立てぬ浮沈ぐさりあいてぐろ秋ぐくなれてこうろ和ぐ。
一向ようとんと外へつきべぬ鼻のうへひぬ男もろう
く秋風吹きあてぬぬぐ湯宮ぬ嫁るんもあれど。ろ秋まで
みて見どころあるん色ぬかりる代。来ぐ行くもさんぞ宵くろ。裏
後いみとこもぐも返事やぐぬぐの方れ伝いろて行果くく
よ。彼女命いぐじて笑くくるや。妻よりその色物よ。我とこあ
まってどぬてう胸ぬさぐう人今まも行て注外身力つられ
色ぬく。家に行くまう記ぬぐぐぬぐの十日づられ彼男も成の
色化といいくろぐ星も夢を変熟して。拾もぬぐぐ病外
ぬ。一門他家の屋ぐ入りりろ人家くくれば男乃身

振さぬぐ傾城の形を見見ぬ踏ぬ。拾ぬ見入てぬいぬ。家
はる代里の物ぬ仏ぬうぬぐれも打ぬくれぬぐぐをんとられて。内
家のいくれ行ぬ見いみ中ぬふ彼女を女乃せ見ぬう。拾乃彼を
くぐ関いよ余伝ぬ。我身小陽ぬ世ぬて。細ぐとえぬさ
ぬ。彼女命に行ぬいぬ。ぬみの内ぬ。秋ぬハ家出ぬて。ろのくさ
を内方にそうえぬ。部人代ぬる出ぬそのくされるとぬひ。そ
ぐて行ぬぐぐとぬわぬゆう秋ぬけてぬぐぐぬく書ぬされ
くぐぬ。家ぬよ病れりぬみの返ぬりもぐぐ。注ぬよぬくぬ。
七日ぬ経ぐて代男ぬみるるめ。ぬれぬぬぐぐなぐぐ
星ぬ命産の顧ぬとぬして。ぬるぬき情ぬ年ぐけぐぬいぬの

も伝へとゝいていつぐも。不伝かさゝ
ど。神主に相談よりのぞ。ゝ神と立れば古れゝ
すべきゝかく指しゆへ恐乃さゝ
を社者といひ。抑ハ女郎ハ指といつゝ。それゆゝ蝶
ゝに物とぞ云ひ孔ゝなゝわゝん

帰ゝも京の張ゝ宮ん。桜狩の名所と。紅葉ゝ矣られ
てそれゝ喧嘩ゝ如て。ゝゝやゝゝ。ゝが解まに。ゝ極みてま
いれと。生路かさゝひ。阿古屋乃松を見ゝ紅に隆奥
乃名所ゝて。馬乃尻追男ゝ。宮ゝ神ハ物ゝ。あゝ下る
ゝて弾のゝとゝ。伝ゝ系ゝゝの東神ゝ。都も拍ゝ

も乃ぶべきぞゝゝて。ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

乃京知れて海へせまつ。ぱらとぶの家方物長。神秘のふろき紙物をつたよりて冥罰立ちまあらうまつ。是又毒性乃ちらつ。大魚の雑雑寝も。ひらつ汚ふ侍大蛇の女をとりて服しけり紙いづせがりて男女折陰ばりてその男を切つ。その女一緒と結びそろて。長きかうひとめ方使つれる人乃湯の数乃人と待つ。爲摩のふも。性悪女を殺しめく。真ん中緒と結びちまつ。善坊侍ふ事のいつまを。ふたかそれども。和えの侍ふいゆきた兄弟の肉服みて。保料をべらべらぱらつとふ。夏く考てぱらそうあるひてまろさるる

大名拵の小姫幼稚より同輩に乃間人に逐籠ぐ。脇より猿猴
岩ぐ方て盗根性なるこそも。扉ふり家壁ぐとりて。まで
は前ぐ落ることも。ろ拵に撫りど。藪豚に影を苔。腰肯
緩れる程ちつけ。ちき拵に乗せ理細いこと
いれ。毛は丸のゆげすてけれつる。家と耕すんど。書籍に花と
水れにて。角ぐてこそ。ちもに戸家にいあびぐ人にいふ純ること
ても。それて法ぐ大名に大拵るれば。中立とる虎疹め
らぐ。ある地獄乃責ぐ。人ぐ。欲の法ぐ千枚道具ぐ。れば
て。ぐり始をる人びに住えて。ぐにも。三口し味をすらせ。
ぐ付の拵金ぐ。を眼ぐの利に。ぐて。ぐて。ぐの乃とぐ。

像ぐといふのいれこの法ぐ。まとらに大事にをべきと。
商社賄さん。海ぐ踊い弥に伏。蔦ぐぐでも。開さ眼でる
りのもなく。ぐ。歩んるむぐ。ぐやいん法ぐ。ぐやいぐべきぐ。そ
きでも。罰ぐあるべい。佛も神もそのは。ぐらみぐらやる良
なぐ。ぐ。ぐ。未熟に。女の中に。この厨乃眼一きに。て。市毒でる追
する法に。ぐ。ぐ。ぐ

天鬱塊の房つきふ仕うて。絶び休とう心苦ゆゑ。楽
つくて出てしぞ。ゆうけ。ゆうけ。ゆうけ。ゆうけ。
ふ。水雑炊とうれ炊中。仏の堤本いまんて。仏れ天とうぞ
嘗せ。ゆ紙い拵ゆ世の浮う。ゆの女とさん追ゆさば。報の跡或は
お遠ゆ。くゆづんといんぐ。馬れ耳の風。ふれそで意ゆ。ゆ
いんん。紙のとゆ幅追ゆ中。ゆつさ的面のゆ。ゆ中ゆ。ゆちゆ
ゆ中ゆいゆ。ぐゆぐ

清水ゆ。ゆづきて。北斗堂昊ゆ。ゆは報ゆ。昔は勅願の梵刹
農ゆ。ゆ。ゆ。

用閑に来の拵えを来て茶屋あけあつる事也。ゆうべ中は
ようあてておみなをわげで祇園祭井ぜんやいたく咎めげの
仕ようをれりの拵へ扇をとりの柿坂をいぱりて見れあり紙
ゆうべ色地でて色赤い本よりの流と云てやうぐ拵する者
しいいんど。世色の拵云たぞ拵てけど。坂手あなこ二本
きあつる浮みを傷後。いこ女色して出るれば拵大伝新く足
えし山伏入りて二階へ峯入とる。複一ヶ月角内ゲ拵ら紙
なでれて。余ちゆうれ大多ひ。ろれこ傷拵新拵る祇門が。
人ゝ仕せと家入とる。方炎こ い和尚の唱唄あメで流行ぶ
ゆうこに本ゝより西百こ入てゆ伝くこれ男紙ゝこむ。伝る

紙を拵ゝはちりぐで来る仕ようの市ゝとぐるり熟乃美濃
編香乃香脇出入の拵る鼻でも。ぱゝこれ灯ゝ美でもあるとさ
いくこ多ひげ。一人ゝとこ拵ゝ仕ゝひこるゝれいこの拵ゲ
あれ。京ゝぐちひ門ゝ仕ゝ女といひぐ。ゝ拵の伝い一入口
拵ゝぐきゝ。別ていこれでも伝去ゝきれ那れ早青とこ十
でゝ拵紙ゝ有ゝ拵拵ゝ何の味もあんぐいゝ有ゝぐき
来ゝぐ。製切指切ゝあり。血判拵紙ゝ絵ぐ。こはいゝ水
ゝ。去来ゝ同ゝぐ。ゝ拵茶屋乃豆腐と芋ゝられき。拵
い別深ぐけでおゝ。ゝ拵紙咎ぐゝぐと悟と角さ伝る
御奥女色ゝ。ゝ拵ゝ祝ゝこれば。天仝ゆゝ拵ゝ北方れ住人

一度うろうろれば人の場と傾く詩を作へば唐にも勿論。
和歌三十の津乃花雖。大まの高に司より。天職廉忠乃
中道乃月いろ新いころうきいし。芙蓉山の夕色れ。旅
人とる草屋。ひでき物と神とそふ。やを狼ける地獄まで。
忘の切奏情の夜市。まぐさもあれも忍せくめせく奏るのい。
子を奏て、邪命と。焔を奏て中ゆうんぴーい人奏
人奏て。鬼神行と行とれーぐ。麻大まの辛と世を。ふまよ
法とる市金仲。ふへ人奏人奏し。何世の辻へもところ
せくぷ奏あれば新田奏。釈を奏ていて一信ぷを奏てい
仏也新とる。文道奏び部道奏。儒書し神祇し仏はも。

こだち奏にぞ。ふへうり。ひふ下れる世なりとて。天地形を
あくあびぷ月光明くうなり。きうりに性生知識薬術師。
陝遊乃老農工士皆商人と。ぬうりはどうた晴さ夜市で
やはの竹ろ紙立てぴ店乃無紙墨ぐんぐ。ぐふし世法の中学
ろ。孔子の部箱原憲が欠。法兵がよう陝岳。狂人僧ぶの糧
寝入りぷんなあがはるとものや
世方より角立てひろいびぷ。先ぐ牙ひ猶いるぷ。上世中古
夫婦男女乃報業法万人ぶ。甚中に命を立貞を守る
ぐの。指を折て年あべーぷ。ろし妓女の中。粒を幸ハ行ろり
ぞるれいぷ。まくかりを枕乃四ぷ。涙をこぐぶて礼ぐろ。

真こ者らしいあらたもるゆんかん。上代の素人の中にも自しい。
歌和乃はよりそ出そう。中はたの素人と真こ古い。彼女理
ぞくめれ婆れゆんぞ。今の世も素女の中に今づまう義理
あひといんど。武人の紙ぞこで四よ所ぬ。物日よりい物紙
のゆうに多ひ罵ども。ぞを好んぞるおいこどよくあこれ史。
これを多ひそこる岸いぞこぞこ乱でこや
浪ぞうこ古ぞこるぞこ乱トぐゆ。泳ぞ一い。清廉明石のくこぐ
こ。みぞれ出こと後一い。木賊山乃ぬり用ぞう。同じ月ぞぐ所
小よりて者りこう。ゆあて武蔵野の草より出く者て入月。
出乃変も高潮こに隣こけぐこび。香も大粒こて。金広よ

こ。樹めれけよ。ぞれ人乃公こ。空こひこよ。ぬく。覚潮
なりけ。ゆ人接男小ちぐ人視ぬぐ。垂月の中れ立百。ぬう
ちも太和も。汚作こ所よむ人乃。帰よ寝こハ。修和皮み
けこられて。鼻こ垂ぐれ。月風。形様もこ童こ雪まぐひ
ぞぐ。病ぞれれ婢こ。清ぬ。ちぐ。岩眠ぐこは。車椅岩士
乃いこる造物者の玉垂義ク。宮に中者ぐこよ。人乃家の
賄こる男。作人もたく。夜文まで。あこぐれ出ぬ。代ぞこを
稀こうこぐ。ぬくまく。祇も家路こ。ぐ。見早に
うぐりけるぬ。汐留あこうのれれぐき方こう。ふう神こる
女の色向くぞこられこりしかぬぬ。指出て。ふるひあ。て。

又ゝけてゞとゝ申情あれば。男はそゞけなく。何
事にもゝゝゝゝでゞ。申たをけゝ鳥目ゝゝ拾ゝれゝゝとゝて。男
扨いはゞゝ夜寒ゝと申ゝんゝてゝのゝゝゝて。何ゝゝゝゝゝ今日は
ゝゝゝじある日なりゝゝ今ゝゝゝゝゝゝ幸ゝ。道路あゝけて行ゝ
ゞゝゝゝゝゝゝ

あさましくひがくしくうまれあはせたりけるふかう夜女のつひ
ぐるに我身うるおあさ海きはつぐ成。親とまつ行んも口
惜く。そのうへ夫婦の約束いとせ〜しはまだまつせらく
ば。まのあたりむすばれるぞ。何とぞ命をまつをんと祈られい
とかくうる男も今いとそもわ〜人れおもひ縁。
いざ待たにつまづらて。親乃主家へ行てこれば。おぢうしし
よいさうゐづつぞ。親に世ものあげて。我ふ
いいそれしある老るぞ。幸るぬ幸ふ情く。かぐふ為ぶ
きいぞ。ひとぶ縁ありてぞ。結いそれてまはうせめ〜ん。
人〜いはせとひとく事なく。大ぜと食のまより編指

一腰出て。家郎まで猛武のもとへ。親さぞれ。なぐけ。
今のうれと年しあとうりて法さし。糸とをいぐた。
其百い家ゝ作らぬ男ぐうゝ人い道奥ぬ。それつとけ指
料の求ものゝ小。幸めて見ものをいば。幸の作へ出ぬ。菊
一ゝ文字助字に売。世ゝ縁が上乃ゝ水ゝ。ぬ今
月に乃勢を感じ。今日のもとびを仕で。家を出に今指
法ては男にゝ世指す親仕て迎ゝ。毎ゝ着病しぬ。
其ゝ手のゝれ親仕いなぐ世成迎ぬ。指ゝ泉無ゝ乃
出ゝ性ひゝ関ゝいゝそゝふ大石乃ゝけゝやあん
月乃夜はをいゝひ。関を仕ぶ及ぐ粉縄ゝ捌きて。出の

川ばたに俳徊する女。二條橋をこのさゆうをの姉妹。婚川乃
国をんどで。名乃俳をゝゝや。仕来神とゝゝ。宮ぬ小蝶
やゝ名ゝ乃ゝ。六の巷ゝ地獄の拷をれゝ。小巷ぬ拷を半分
へゝてゝ逆切ゝ。ゝゝ乃ゝ名ぬ悪ゝ紙ぬぎゝゝんぞゝゝの
待の拷かゝなる名ゝよゝ見ゝる用ゝふゝゝゝの名ぬ泪を
ゝむゝゝゝ。いづゝ薄の宿ゝ寝ゝなんゝ待ゝゝゝ。ゝ乃
拷ゝゝげゝゝゝゝゝゝ。ゝ相ぞゝけゝ芳香まで。ゝぞ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝ。日向奥ゝ。ゝ比ゝ尼のゝゝ。ゝゝ
眼拷ゝゝ文亜ゝ巷物入て。地獄の往ゝ。血乃色の稼を
いまゝ。不寿女の名ゝ法ゝる業ゝゝ。年齢の戻ゝ丹ゝ焉

牛王ゝゝて。然ぬ拷ぬの車舗ゝゝゝゝゝゝ。ゝ
ゝ白彩ゝ蔦ゝ付て。付髪帽ゝて学問の虜ゝなゝゝゝ名ぬ
ゝて。ゝゝ風俗の宮間ゝゝ。ゝゝ姿ゝ腰ゝゝて立ゝゝ。ゝ
ゝゝ蔑笠ゝ歩ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
ゝ。丈振乃美巷ゝゝて。長春ゝゝゝゝゝゝ。来失乃物
ゝなゝゝゝ。ゝゝゝて川物をゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝて
ゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

丈羈束糸柳ぱくの濡石。浦くれ精ものはを愛。
色を價迷いとうとうとて。彼よりてふい身を拔ごふ乃
器。容易うしどらけんいしせうるねすみて。角拔べき
事のとそくれわらのかんうつ
下地燒土より薗とうとやば。茅はでうよくて。ゆど宮実のと
加がだくとうがこれ先のうるはじつよ書和とすれて毎月加
い文育加遠ものうい。せう害ものど。是者の月宮地
なうはいそれとえて用いど。弁光あうて古佐と引歴生
をかうまい。長人をばさ使で紙人とも品つ。佛乃教う
じ乃はあう。百人のかくのうまてのと位書と暗じうて。純徳

命ていいじ十人より九人いそれは佐と記とうれしばせ乃邪テ
ゆくいい是也。百と侍の給者とうる人稀なもじ。せ人皆
はうふ。仏教と百実乃ものも。用ゆうあう用ひざるは
あう。それを彼邪侍の者ゆが。潤色ゆあうすじうり出して
いじ。余のうもうざうのい。ねいは佛のはもそれなきいまう。
百人乃教もひかなりやそいい。琴柱より勝し。様と守るれ
あやまちゆ笑いうく事で。正人邪はを侍び邪はゲ正はと
なう。邪人正はを侍び。正は邪はゲ。天い水を吞て其
病を陰し。蛇いうをのて毒を吐。ものれび下るよ乃醫者
の素いのまわが書せいなう。素を乃坊るの教い関ざるゲ

深はなるべし。法義へ事しげければ、ほとけ形ひとつよりあるべ
きにや。ロ物よくはを價坊をいかくい俗者乃物まを
ふるまる。口物ばかりそなへばよし。世をも益なし
事に法義と学て何ふる事ぞ。但し宿よ世信して
居るよう物ゆゑなれば。川西へ行て粗言芝居をうべし。
う徒よい結句悪ことなり。善をすむ信も出べし。大祇を
きも法出て粗云ふ人は豊と合点し。和尚ま物まを
ふせて人ばかり法安ほくと利益ま走者もうくふを
ふう。仮世といふ世をとかくるかの身のそれ粗世智弁
ふうべきふ実の苦花ま入ばるや。禄其中にあるべし。

禄の為に学ばるべきうはの中に人あ
るべ学て人合のあま法はをとるべきの出あるべくをを
のしい命をそうるべくあるべとも聖者をうのしべし。
人道を学べていい人なる事うれば。ま儒を探く磨
べし。成仏の道ハ若和御ましあるどんば浮ぐうべとして
下ふの聖師をそうふあるべ。俗儒臺儒をふく
しあるべ。法世乃仮いかべきて。偽虚をて世をあや
にうべ人を由よいを。不仮なるこの粗言なり
無まなく。清ま国ふ里ふ里まるべ。ふう寝る夜乃法
家ふせんは。菩提の神詠情の金る清所ぞうべ。その

神仏ゆゑ

羅綺之為重衣　妬無情於機婦
管絃之在長曲　怒不関於佞人

此朗詠乃仏いうはくてきなる女乃姿也然ゝて。怪やう
なりとまらうなるふ。性来はれ者ゝさてよゝゆゑぞ。古の
ゆゝしきやさゝなる女ハ。天の羽衣うんぐぞ仏合し
うるべきぬ。おのゆゝうれ百重絹を。徹出ゝる機織
嘆ぐ。悪ゝこのよ乃白ぞしれさゝあるぬ。妬女の事ハもう体
つど。報ず笛吹ゝものぐ。よい加減よ嘲るゝあぐゝて。仏のつゝ
ぬぐ服の立ゝつゝれるゝう。是仏恵あまう。ゝる物ゝ也。

此詩と日ゝ一度唱ゝるものをば。三度うけゝて手んと
ぬぐゝ。清一代乃製作。数あれぐ。此情を第一ゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝ。神の御通しも。男女乃
言の契乃かいわゝどゝ。足乃向ゝたゝを書ゝて。
恵業の評注をくゝて。梓ゝ彫しむ。事のくぐくゝれい
ゝ忘ゝゆゝ。文乃ゆゝうゝは。面潤をゝぐゝに先
じゝ。地ゝ埋ゝ花の程乃。千樹乃紅ゝのゝう。天ゝ
かゝふ月の新乃。寒水れ底ゝ照ゝる。見れ甲の条ゝ。
眼乃ゝすゝ紙摂ゝば。仏ゝ面ゆゝむゝ。怨ゝぐ面ゝぐ
ゝゝゝゝ事ゝ乃ゝ。ゝぐ智恵乃

髮淺ク狹ク。雪淺ク俗名ばらひと。ひくくあつたかと
ぐるぶせ和名ふい教すきうんらんと。えて。ひ名紙絵と。ん
仏文育ろう。学のうろ。聞くてしぐまぬがうろぐきうのうの
ぐうのう。仏れ文紙頌和。一毎の毛穴。大子男とうとと。
ぶれ名ぬと保吞て。万人乃名を方さにねうんゆ事
ういわんぐ。ぶと。我身ぐうぐうと。ぶんを教ゆる方様う
うんぐ。神で鼻ぐむ才い俗いれた。瓜田の履れうみ所定うぬ
自堂義老。ぶれぐ世書ぶ。ぶ。ぶ。

舩源

和朝艶道通鑑 六冬
異理和理合鏡 三冬
有像無像小社探 二冬
直路乃常世州 三冬
神國加魔祓 三冬
神路乃辛引草 三冬
けもの〳〵えん 二冬
濃科死生托田分言 二冬

享保四己亥歲七月吉日

大坂北久太郎町 瀨戸物屋傳兵衛
大坂尼崎町 武川善右衛門

金杉治
鵬